

改めた。

半井本『保元物語』… 栃木孝惟ほか校注『保元物語・平治物語・承久記』

新日本古典文学大系 所収、岩波書店、一九九二

金刀比羅本『保元物語』… 永積安明ほか校注『保元物語・平治物語』

日本古典文学体系 所収、岩波書店、一九六一

古活字本『保元物語』… 永積安明ほか校注『保元物語・平治物語』

日本古典文学体系 所収、岩波書店、一九六一

延慶本『平家物語』… 北原保雄ほか編『延慶本 平家物語』本文篇上、勉

誠出版、一九九〇

『源平盛衰記』… 松尾葦江校注『源平盛衰記』(二) 三弥井書店 一九三三

『白峯寺縁起』… 『香川叢書』第三 所収、香川県、一九四三

なお、『白峯寺縁起』はその奥書によると、白峯寺の再興に当たり代々の旧記や記録に従って清原良賢が応永一三年(一四〇六年)に記したものである。

(10) 面が象徴する意味については『能・狂言事典』前掲(6)を参照した。

(11) 『吉記』寿永二年(二月二九日(増補史料大成、臨川書店、一九六五))

(12) 『玉葉』建久二年(閏二月二八日(『玉葉』三、名著刊行会、一九七一))

(13) 本多典子「『白峯寺縁起』覚書き―讃岐と都・地方と中央」(『伝承文学論』ヘジャンルをこえて) 東京都立大学大学院中世文学ゼミ、一九九二)

(14) 『白峯寺縁起』の筆者清原良賢は、足利將軍家の師範も勤めた当時名高い儒家の公家で、世阿弥との交流が指摘されている。

落合博信「『五位』の成立とその性格―清原良賢跋文の問題その他」(『中世文学』三三三号、一九八八)

(15) 山田雄司『崇徳院怨霊の研究』思文閣出版、二〇〇一

(16) 徳永誓子「後鳥羽院怨霊と嵯峨皇統」(『日本史研究』五一二号、二〇〇

〇五)

(17) 勝俣隆「天狗の古典文学における図像上の変化に関する一考察―鳥天狗から鼻高天狗へ」(『長崎大学教育学部紀要 人文科学』七一巻、二〇〇五)

(18) 木下資一ほか校注『宝物集 閑居友 比良山古人霊託』新日本古典文学大系、岩波書店、一九九三

(19) 伊藤聡「魔界に堕ちても構わない?」(『日本文学』第六九巻一〇号、二〇二〇)

(20) 田中貴子『外法と愛法の中世』砂小屋書房、一九九三

(21) 日本古典文学体系『保元物語・平治物語』解説 岩波書店、一九六一

(22) 香川叢書第三(前掲書(9)) 所収
(23) 志度の海底にある龍宮から珠を取ってくる伝承は、能「海土」や幸若舞曲「大織冠」などの中世芸能の物語に取り込まれている。

(24) 『謡曲集』上 日本古典文学大系 所収、岩波書店、一九六〇

(25) 「白峰の相模坊」はいわゆる八大天狗に数えられるが、「八大天狗」がいづから認知されてきたのかは定かではない。少なくとも能「鞍馬天狗」には後ジテの鞍馬の小天狗が連れてきた天狗について、「筑紫には彦山の豊

前坊、四州には白峰の相模坊、大山の伯耆坊、…」と列挙されている。(『謡曲集』下 日本古典文学大系 所収、岩波書店、一九六三)

(26) 笹本正治『鳴動する中世―怪音と地鳴りの日本史』朝日新聞社、二〇〇〇

(27) 横道萬里雄「能の小段 囃子事」(『能の構造と技法』岩波講座能・狂言Ⅳ、岩波書店、一九八七)

(東京都立産業技術高等専門学校ものづくり工学科一般科目)

と言っていたことに思い当たる。崇徳院霊はこれまでも、かつての憤怒を思いついと逆鱗の姿となり、そのようなときには天狗たちが参上してなだめたいということだった。崇徳院霊は西行の詠歌に呼び出されて登場し、彼にとっては日頃繰り返されている激情の姿と天狗による慰撫のありさまを西行に見せているのである。これは、西行というワキの目を通して、観客の属する現実世界に向けて可視化していることにもなる。

先述してきたように「松山天狗」の成立時期は不明である。が、崇徳院怨霊の祟りが怖れられ、怨霊説話が成長していった時代に重なることは間違いない。曲折を経ながらも上演が続いてきた現代に至るまで、崇徳院怨霊は最も怖れられている怨霊であり、近代に至るまで様々な鎮魂祭も行われてきている。しかしここには、その現実とは異なる姿が描き出されている。怨霊は能舞台の上で祟りもたらさないし、鎮魂されて往生することもない。繰り返し願志によって逆鱗しては、繰り返し慰撫されているだけなのである。慰撫され続けていることを演じ、現実世界の者たちに見せることにこそ「鎮魂」の意味があるというべきだろう。

五 おわりに

崇徳院の霊は、詠歌によってその霊を祀る廟の前に呼び出され姿を表した。そしてそこで、自らが現在存在している魔縁という異界での様子や心情を語り、舞楽を演じ、それらを現世の者たちに見せる。舞楽の昂揚は感情の昂揚をもたらし、慰めとなる一方で感情の大きな起伏となる。その心情はあからさまに語り出され、そのあからさまな語りによって現世と異界の境は消えるのだ。そして最後に、歌によって呼び出され舞楽と共に舞台上に繰り広げら

れた異界の風景は、夜明けと共に消え去る。

これは、神のおわします所の前庭に神をお呼びして、夜中舞楽を奏上して共に遊び、夜明けと共にお送りする、芸能の根源的な姿そのものではないだろうか。かつて参観した春日若宮おん祭の御旅所での芸能奉納や、信州遠山郷の霜月祭における湯立て神楽などのありさまが彷彿としてくる。崇徳院は畏怖すべき魔縁に堕ちその霊は怨霊となったが、異界におわす霊を舞台上に呼び出してそのありさまを現し、歌と舞楽という芸能によって慰撫するとう能「松山天狗」は、まさに崇徳院怨霊の「鎮魂劇」なのである。

【注】

- (1) 安田孝子ほか校注『撰集抄』上 現代思潮社、二〇〇六
- (2) 表章「能楽史」概説（『能楽の歴史』岩波講座能・狂言Ⅰ、岩波書店、一九八七）
- (3) 山田雄司『跋扈する怨霊―祟りと鎮魂の日本史』吉川弘文館、二〇〇七
小松和彦『神になった日本人』中央公論社、二〇二〇
- (4) 佐成謙太郎『謡曲大観』第五卷、明治書院、一九三一
本稿においては『謡曲大観』所収の謡本の詞章を検討に用いた。引用にあたっては、旧字体は新字体に改め、理解の便を図るために必要に応じて私に句読点を付した。
- (5) 野上豊一郎編、中央公論社、一九三五
- (6) 西野晴雄ほか編『能・狂言事典』平凡社、一九八七
- (7) <http://www.noh-kyogen.com/story/na/matsuyamatengu.html>
- (8) 後藤重郎校注『山家集』新潮日本古典集成、新潮社、一九八二
- (9) それぞれの本文は次の活字本による。引用に当たっては旧字体を新字体に

後場で姿を表した崇徳院霊はどのように描かれ、どのようなありさまを見せていくのだろうか。

怪士の面を付けた後ジテが塚の中から現れる。怪士の面は、神性をもった男の霊を表している。瘦男の面ではないことから、崇徳院霊は「怨霊」という位置づけではないことがわかる。御廟が鳴動して、崇徳院の霊が次のように姿を表す。

いかに西行、これまで遙々下る心ざしこそ、返す返すも嬉しけれ。又唯今の詠歌の言葉、肝に銘じて面白さに、いでいで姿を現さんと、いひもあえねば御廟頻りに鳴動して、玉体現れおはします

塚の鳴動に言及するのは『保元物語』『平家物語』のうちでは金刀比羅本『保元物語』のみである。金刀比羅本『保元物語』では西行の詠歌のあと「御墓三度迄震動するぞ怖ろしき」とあり、塚の鳴動が天変地異を予告するという時代の文化的認識⁽²⁶⁾の下に、崇徳院怨霊の脅威を語っている。一方『白峯寺縁起』では、「御納受もやありけむ、たびたび鳴動したりけるとなむ。」とあって、西行の詠歌を受け入れたという崇徳院霊の意思表示としての塚の鳴動であり、「松山天狗」と同じく西行の訪問と詠歌が怨霊を慰めていると解釈できる。

誠に妙なる玉体の、花の顔ばせたをやかに、ここも雲居の都の空の、夜遊の舞樂は面白や。

ここで演出は「早舞」を記している。「早舞」は、公家の霊が楽しげに舞う姿を表すものである。⁽²⁷⁾ 西行の詠歌に慰められた崇徳院は日頃の憤懣から解かれ、ここも宮中と同じことであると上機嫌で舞樂に興じ舞い続けるのである。しかしそれは一時のことだった。

かくて舞樂も時過ぎて、御遊の袂を返し給ひ、舞ひ遊び給へば又古の都の憂き事を思し召し出だし、逆鱗の御姿あたりを払って怖ろしや

あれあれ見よや白峯の、山風荒く吹き落ちて、神鳴り稲妻頻りに充ち満ち雨遠近の雲間より、天狗の姿はあらはれたり

舞は感情を昂ぶらせる。昂ぶった心は憤怒の感情を思い出させ、崇徳院は怖ろしい逆鱗の姿を表す。その瞬間、強風と雷と稲妻とともに、白峯から天狗が飛んで来るのである。

鬼神を表す癒見の面を付け赤頭に兜巾をして大団扇を持った後ツレが、早笛で登場する。典型的な天狗の姿、登場の仕方である。後ツレは白峯の相模坊であると名乗り、常々から院の心を慰めていると語る。

抑もこれは、白峯に住んで年を経る、相模坊とはわが事なり。さても新院思はずも、この松山に崩御なる。常々参内申しつつ、御心を慰め申さんと、小天狗を引き連れて翅を並べ数々に、この松山に随ひ奉り、逆臣の輩を悉くとりひしぎ、蹴殺し会稽を雪がせ申すべし。叡慮を慰め、おはしませ

相模坊は、「逆臣たちを全てひねり潰し蹴殺し、復讐して差し上げますから、どうぞお心を和らげてください」と言い、舞働をする。舞働は、天狗が威勢を示す勇壮な動きである。

その時君も悦びおはしまし御感の御言葉数々なれば、天狗もおのおの頭を地につけ拜し奉り、これまでなりとて小天狗を引き連れ虚空にあがるとぞ見えしが、明けゆく空も白峯の、明けゆく空も白峯の梢に、又飛び翔って失せにけり

崇徳院は相模坊の言葉と逆臣を撃つ勇ましい姿に悦びを表し、天狗たちに労いの言葉をかけるようになったので、天狗たちは役目を全うしたとばかりに、夜明けと共に白峯山めざして飛び去っていった。

前場で前ジテの老翁が「折々は、都のことを思し召し出だし、御逆鱗の余りなれば、魔縁みな近づき奉り、あの白峯の相模坊に従ふ天狗ども、参る」

が朝にかぎらず、天竺・震旦にも、国を論じ位をあらそひて、舅・甥謀叛をおこし、兄弟合戦をいたす事なきにあらず。我此の事をくゐおもひ、悪心懺悔のために此の経をかき奉る也。しかるに筆跡をだに、都にをかざる程の儀に至ては、ちからなく。此の経を魔道に廻向して、魔縁と成て、遺恨を散せん。」と仰せければ、此の由都へきこへて、「御ありさまみてまいれ。」とて、康頼を御使ひに下されけるが、参りみ奉れば、柿の御衣のすすけたるに、長頭巾をまきて、御身の血をいだして、大乘経の奥に御誓状をあそばして、千尋の底へしづめ給ふ。其の後は御つめをもちやさず、御髪をもそらせ給はで、御姿をやつし、悪念にしづみ給ひけるこそおそろしけれ。

これほどまでこのように一致しては、この間狂言は、古活字本『平家物語』を文字で見た上での脚本であると言わざざるをえない。古活字本『平家物語』の成立年代はわからないものの、一般的に古活字本が刊行されたのは室町時代末期から江戸時代初期のごく短い期間であるから、この間狂言成立の年代については自ずと可能性のある時期は狭まるだろう。ただし、この間狂言の詞章はそれが上演された時の詞章であろうから、「松山天狗」の成立時期を直接に証するものではない。

このように「松山天狗」のアイは『保元物語』が醸成した崇徳院怨霊のイメージのもとに崇徳院のありさまを語り、後場の世界を舞台上に創り出していく。五部大乘経を都から戻された時の絶望と恨みの様子、そして金刀比羅本『保元物語』の表現を借りれば「皇を取て民となし、民を皇となさん。」と国家転覆を誓うほどの憤怒を、アイは「瞋恚の焰きはもなく」と一言で語った。「瞋恚」の語は『白峯寺縁起』でも用いられているが、能「葵上」⁽²⁴⁾の六条御息所の生霊の台詞にもあるように、能舞台に呼び出される靈魂の激情ともいえる激しい怨念を表現することばである。

アイは続ける。

かほど憤り浅からぬ事なれば、相模坊も尤も痛はしく存じ、玉体に近づき奉り、会稽山の恥を雪がせ申すべきとの御事なり。新院も御年四十六にて遂に御果てなされ候。然るに西行法師修行の序にこの所に御出であつて、新院の御廟にて御歌を詠まれたると申す。その御歌は、よしや君むかしの玉の床とてもかゝらん後は何にかはせん、と詠み給へば、亡魂嬉しく思しめし、重ねて玉体を現し、終夜舞楽を奏して御対面あらうずるとの御事なれば、相模坊にも諸天狗を伴ひ、参内仕れとの御事なり。皆々その分心得候へ〜

白峯山の天狗相模坊⁽²⁵⁾がやってきて崇徳院の瞋恚に寄り添い慰めたと前場での前ジテの語りを補足し、西行の詠歌を繰り返すことで、舞台上は過去から現在に戻る。そして、崇徳院の霊が姿を表すことを予告し、相模坊をはじめとする天狗たちにも参集を呼びかけるのである。前場で魔縁と天狗を同一と捉えている台詞もありながら、ここでは崇徳院を「魔縁」、相模坊たちを「天狗」と呼び分けていることは興味を引かれるところである。

「松山天狗」では、崇徳院は魔道に墮ち天魔となった。同じ魔縁の者たちである相模坊は天狗だが、崇徳院については「柿の御衣に篠懸兜巾をたれ」と典型的な天狗の姿を示唆し、先述の『比良山古人霊託』にあるように同時代にはすでに天狗と認識されていたにもかかわらず、あからさまに「天狗」という語を用いないところに、能作者の意図が込められているのではないだろうか。ここにもひとつの能作者の創作があると考えられるのである。

四 後場―崇徳院霊の常の姿を見せる

とも一二三年は下らないとされ、また、古活字本は金刀比羅本の影響を受けていることが指摘されている。⁽²¹⁾『源平盛衰記』や延慶本『平家物語』は、数多く伝わっている『平家物語』諸本の内で読み本系に分類されるもので、源平の合戦譚を軸に、周辺の様々な説話や伝承を書き込んでいく。これらの諸本を並べ比較することによって、崇徳院の天狗化（怨霊化）の説話が、語りによって増殖していく様子を見ることができるのである。

先述のように一五世紀における崇徳院伝承の一つの集大成とも言える『白峯寺縁起』では、書写した五部大乘経を返された崇徳院の様子を以下のように記している。

大きに瞋恚をおこさせ給ひて、我大魔王となりて、天下を我まゝにせんと御誓ありて、小指をくひきらせ給ひて、五部大乘経の箱に竜宮城に納給へとあそばして、椎途の海に浮させ給ひたりければ、海上火にもえて見えけるに、童子出て舞をまひて納ける。そのとき讃岐院、さては我願成就しけるとて、御ぐしをもそらず、（中略）まことに大魔王とならせたまふやらむ。今も御廟所には、番の鶏とて、一羽祇候するなり。

「椎途の海」がどこかということに関しては諸説ある中で、一説に「椎途」と見做されてもいる志度には、『讃州志度寺縁起』⁽²²⁾にも書かれているとおり、その海底に龍宮があるという伝承がある。⁽²³⁾童子の舞は、天下を転覆しようとの崇徳院の意志通りに、五部大乘経が龍宮に納められたことを明言している。崇徳院の崇りによって平治の乱が起こり、源平の争乱によって平氏は滅び、世が乱れて武士の世になってしまったとして崇徳院怨霊の恐ろしさが一五世紀には広く世に認知されていたわけだが、それが『白峯寺縁起』の上記の記述に反映しているのである。

能「松山天狗」は少なくとも室町時代の作とされており、能作者は『白峯寺縁起』が記述しているような認識を共有していたにちがいないことが、前

場での検討に加え、ここでも指摘できるのである。

崇徳院が五部大乘経を書写した動機やその成り行きは諸本によって異なる。事実上も異なる。では、このアイの語りは、どの記録、あるいはどの記憶によっているのだろうか。本稿で検討に用いている謄本の間狂言の詞章が、古活字本『平家物語』の当該部分と語句のレベルで極めて共通していることに驚く。両者の詞章を比較し、語句が一致する部分には傍線を、語句はやや異なるものの同一内容の部分に二重傍線を付すと、次のようになる。

〈問狂言〉

偏に後世の爲にとて、五部の大乘経を遊ばし、鐘の音も聞えざらん所に納むるも不便なり。王城近き八幡山に籠りたく思し召し、仁和寺へ御上せ候へば、主上この由聞こしめし、御手跡だに御許しなく遂に御返しあれば、瞋恚の焰きはもなく、わが悪念懺悔の爲、この経經を書きつけ、さらばこの仇に報いんとて、魔道に墮ち天魔にならんとて、柿の御衣に篠懸兜巾をたれ、大乘経の奥に血を以て御誓ひ状を記し、千尋の底に沈み給ふ。

〈古活字本『保元物語』〉

ひとへに後世の御ため。」とて五部の大乘経を三年がほどに御自筆にあそばして、具鐘の音もきこえぬ所に、をき奉らんもふびんなり、八幡山か高野山か、もし御ゆるしあらば、鳥羽の安楽寿院故院の御墓にをき奉り度きよし、平治元年の春の比、仁和寺の御室へ申させ給ひしかば、五の宮よりも、関白殿は此の由つたへ申させ給ふ。殿下よりよきやうにとり申させ給へども、主上つるに御ゆるされなくして、彼の御経を則ちかへしつかはされ、御室より、「御とがめおもくおはしますゆへ、御手跡なりとも、都ちかくはをかがたきよし承り候ふ間、力をよばず。」と御返事ありければ、法王此のよしきこしめして、「口おしき事かな。我

このように保元の乱のあらましは史実の通りに淡々と簡潔に説明されるのだが、崇徳院の天狗化のありさまを語っていく語りには、そもそも伝承の物語であることから、さまざまな興味深い問題をはらんでおり、詳しく検討する必要がある。

崇徳院怨霊説話は、『保元物語』『平家物語』などの軍記物語に描かれているが、それらの物語の中で語られることによって成長し醸成されていった。その背景には、自身の病気をきっかけに時の災害や乱世の原因を崇徳院の祟りであると怖れた後白河院のさまざまな鎮魂活動によって、人々が崇徳院怨霊を畏怖の対象として強く意識するようになった、時代の認識がある⁽¹⁵⁾。そしてさらに、承久の乱を経て後鳥羽院の怨霊が猛威を振るっていた時代の中で崇徳院怨霊の物語は成長し⁽¹⁶⁾、『保元物語』も成長していったのである。『保元物語』は崇徳院怨霊を語り鎮魂する物語であると言ってもよいだろう。

では、崇徳院怨霊化の物語はどのようなものか。

都から遠く離れた配流先の讃岐で、崇徳院は後生菩提のため五部大乘経を書写し、都近くの寺社への奉納を望んでゆかりのある仁和寺に送ったが、朝廷側に拒否され五部大乘経は送り返された。激しい怒りと恨みを抱いた崇徳院は、自ら魔縁となって崇りをなすとの誓文を血書し、五部大乘経を海に沈めた、というのが、「松山天狗」での物語の大筋である。一方で『保元物語』『平家物語』では諸本によって表現に次のようなバリエーションがある。

半井本『保元物語』では、崇徳院は納経を拒絶した朝廷を後生までの敵とするとして、戻された五部大乘経を三悪道（地獄）に投げ込んで「日本国の大悪魔とならん」と誓い、舌先を食い切った血で経に誓文を書き、生きながら天狗の姿になったとしている。

金刀比羅本『保元物語』では、経の奉納が認められなかった時点で、後世のための経を置いてもらえないならば生きても無益であるとして、崇徳院は

生きながら天狗になった。そして戻されてきた五部大乘経については、

悪道に投げ込み、其力を以て、日本国の大魔縁となり、皇を取て民となし、民を皇となさん。」とて、御舌のさきをくい切て、流る血を以て、大乘経の奥に、御誓状を書付らる。「願は、上梵天帝釈、下堅牢地神に至迄、此誓約に合力し給や。」と、海底に入させ給ひける。

と書いている。

古活字本『保元物語』では、崇徳院は「魔道に廻向して魔縁と成って遺恨を散ぜん」と自身の血で誓状を大乘経の奥に書いて海の底に沈めたとはあるが、「天狗」という語は用いていない。

『源平盛衰記』では、表現も含めて半井本とほぼ同じだが、「日本国の大魔となる」と表現している。

延慶本『平家物語』では、天狗という語は用いないものの、崇徳院は「御髪モメサズ御爪ヲモ切ラセ給ハズ、柿ノ頭巾、柿ノ御衣ヲ召」という『今昔物語集』をはじめ中古中世の説話集にも描かれているような天狗を示唆する姿⁽¹⁷⁾となって、爪から出した血で五部大乘経を書写し、都に送る。そして戻された経に、舌先を食い切った血で「日本国を滅ぼす大魔縁となろう」と誓状を書き、海底に沈めるのである。

魔縁の様子は『保元物語』と同時代に書かれた『比良山古人霊託』⁽¹⁸⁾にも記されており崇徳院も強力な天魔として登場している。魔縁とはそもそも平安後期に作り出された地獄・極楽とは異なる現世に近いあの世であり、魔道に堕ちると死後もこの世に影響力を及ぼすことができる。中世に至って天狗と習合したという⁽¹⁹⁾。そしてまた、五部大乘経を海底に沈めるとは経を龍宮に奉納することであり、龍宮への経沈めは国家転覆の祈誓を意味する⁽²⁰⁾。

『保元物語』の諸本の成立年や先後関係については研究は進んでいるものの明確にはなっていないが、半井本が一番の古態を持っており成立は少なく

となっており、能作者の手腕が感じられるところである。

興味深いことに、『解註謡曲全集』所収の謡本では、この場面は次の様に謡われる。

かやうに申す老人も、常々参り木蔭を清め、御心を慰め申ししなり。

浜千鳥跡は都へ通へども 身はまつ山に音をのみぞ鳴く

暇申してさらばとて、

前掲の『謡曲大観』所収の謡での「さても西行唯今の詠歌の言葉、肝に銘じて面白さに、老の袂をしをるなり」という詞章がそっくり「浜千鳥」の歌に入れ替わり、西行の「よしや君」の奉歌への返歌となっているのである。

この「浜千鳥」の歌は、『撰集抄』では詠われないが、半井本『平家物語』の次の場面で詠われている。

御自筆ニ五部大乘経ヲ三年アソバシテ、御室ニ申サセ給ケルハ、「後生

菩提ノ為ニ、五部大乘経ヲ墨ニテ如形書集テ候ガ、具鐘ノ音モセヌ遠国

ニ捨置カン事ノ不便ニ候。御免候ハバ、八幡ノ辺ニテモ候へ、鳥羽カサ

ナクハ長谷ノ辺ニテモ候へ、都ノ頭ニ送置候ハバヤ」ト申サセ給ヒテ、

御書ノ奥ニ御歌ヲ一首アソバス

浜千鳥跡ハ都ニ通ヘ共身ハ松山ニネヲノミゾ鳴

ここでこの歌は、崇徳院が配流先の讃岐国松山で書写した五部大乘経を、都の近くの寺社に収めてほしいと仁和寺御室に送った際の書状に、「自分の書いた筆跡は都に行くことができるが、この身は松山で泣くばかりだ」との心情を付したものである。金刀比羅本『保元物語』、古活字本『保元物語』、『源平盛衰記』にもこの歌は崇徳院の詠歌としてある。つまり、『解註謡曲全集』所収の謡では、前ジテの老翁が崇徳院の化身であることを、一層明確に表現しているのである。

以上のように、西行が崇徳院の廟所を訪ね院の霊を呼び出してそのさまを

描いていく「松山天狗」においては、『山家集』に明記されている西行が訪ねた「院おはしましけん御跡」である「松山」こそが、訪ねるべき場所であった。西行が松山の御廟を訪ね、崇徳院の生前の日々に思いを致して歌を詠んだことが、崇徳院の霊を呼び出すことになった。

「松山天狗」の前場は、『撰集抄』の西行訪問説話の構図に則りながら、つまり「本説」としながら、『保元物語』などに描かれている崇徳院怨霊説話を想像力の礎として、舞台上に崇徳院霊を呼び出すという能ならではの演出が、能作者によって創り出されているのである。

三 間狂言―魔道に墜ちた崇徳院を語る

シテが塚の中に姿を消すと、アイが動植物の精霊を表すというウソブキの面を付けて登場し、次のように名乗る。

かやうに候者は、讃岐の国白峯相模坊に仕へ申す木葉天狗にて候。

アイは、前場で前ジテが語っていた崇徳院を日々慰めている天狗たちのうちの一人ということになる。間狂言は、崇徳院の讃岐配流に至る保元の乱のあらましと、院の魔縁（天狗）化のありさまを、名乗りに続き、次のように語っていく。

さても人皇七十五代崇徳院と申し奉るは、鳥羽第一の皇子なり。御弟近衛院崩御の後、新院第一の皇子長安親王を御位になし奉らんと申し召す処に、美福門院の御計らひにて、鳥羽第四の皇子本院と申すを御位にし給ふ。後白河の院これなり。この意趣によって、新院本院御仲不和になり、夥しき争ひありしが、新院うち負け給ふによって、当国この所に流され給ふ。

たとえば、崩御の地については史実としての定かな記録はなく、『保元物語』や『平家物語』あるいは『白峯寺縁起』などの一連の崇徳院説話を描く諸本において、「松山」「鼓岡」「志度」などとされて揺らぎがある。また、「松山」は諸本によっては崩御の地であるほかに、讃岐に到着して最初に上陸した地であったり、まったく登場していなかったりするのである⁽¹³⁾。ちなみに『白峯寺縁起』では西行は「御廟」を訪ねるとして頓證寺に行っており、御影堂として頓證寺を建立したという史実に沿っている。このことによって、『白峯寺縁起』の筆者清原良賢が能「松山天狗」を観ているか、能作者と共通の情報に接していた可能性があると考えられる。能「松山天狗」の成立時期や成立事情を検討する手がかりとなり得るだろう⁽¹⁴⁾。

『山家集』下 雑（一三五三番・一三五四番）には、次のようにある。

讃岐に詣でて、松山の津と申す所に、院おはしま

しけん御跡たづねけれど、かたも無かりければ

松山の波に流れて来し舟のやがて空しくなりにけるかな

松山の波の景色は変わらじをかたなく君はなりましにけり

そしてこれらの歌の次に掲載される一三五五番の歌が、『撰集抄』巻一第七話「新院御墓」の中で詠まれ、また「松山天狗」では崇徳院の霊を呼び出す契機となる次の歌なのである。

白峯と申しける所に、御墓の侍りけるに、まゐりて

よしや君昔の珠のゆかとてもかからん後は何にかはせん

能作者は崇徳院陵あるいは御影堂を「廟所」と見做したのかも知れないが、いずれも「松山」ではないのにあえて「松山」という地名にこだわっているのは、『撰集抄』の西行訪問説話の典拠である『山家集』の前掲の歌群をよく知っており、それを踏まえたと考えられる。

ここで「松山天狗」の前場に戻ろう。

西行は御廟のあまりに寂れた様子に涙し、崇徳院の無念の日々に思いを寄せ、歌を詠む。

さてはこれなるが新院の御廟にてましますかや。昔は玉楼金殿の御住居、百官卿相にいつかれ給ひし御身の、かかる田舎の苔の下、人も通はぬ御廟所のうち、涙も更に止まらず、あら御痛はしや候。かくあさましき御有様、涙ながらにかくばかり、

よしや君むかしの玉の床とてもかからん後は何にかはせん

この歌に深く感じ入った老翁は、西行の問いに答える体で崇徳院存命のころの当地での様子を語る。

君存命の折々は、都のことを思し召し出だし、御逆鱗の余りなれば、魔縁みな近づき奉り、あの白峯の相模坊に従ふ天狗ども、参るより外は余の参内はなく候。かやうに申す老人も、常々参り木蔭を清め、御心を慰め申ししなり。さても西行唯今の詠歌の言葉、肝に銘じて面白さに、老の袂をしをるなり。暇申してさらばとて、また立ち帰る老いの波、翁さびしき木の下に、立ち寄ると見えしが影の如くに失せにけり

崇徳院が無念の余り激しく憤っていたために魔縁の者が近づき、白峯の相模坊をはじめとする天狗たちが伺候するほかは誰も参る者はおらず、自分も日々参内して庭の掃除などをしながら御心を慰めていた、今の詠歌に涙した、と言って消えてしまう。シテは舞台上に設えられた塚の作り物の中に入って行き、中入りとなるのである。

前ジテはここでワキに向かって「さても西行」と呼びかけている。最初に出会った時は「西行上人にてましますかや」と敬称と敬語を用いていた。この言葉遣いの変化は、前ジテの老翁は実は崇徳院の化身であったことを推測させる。西行の詠歌に感じ入って感情が高ぶり、次第に本性を現し始めていく中での「さても西行」という詞は、前ジテの正体を示唆して後場への繋ぎ

御廟が鳴動して崇徳院（後ジテ）が姿を現す。西行の訪問と詠歌を喜び、一晚中舞樂に興ずる内に、かつての屈辱の記憶を思い出し、恐ろしい逆鱗の姿となる。その時、雷と共に白峯の天狗相模坊と手下の小天狗たちが現れ、院の怒りをなだめて鎮め、やがて夜明けと共に飛び去って行った。

現在「松山天狗」の謡曲の詞章を活字で見ることができるのは、わずかに『謡曲大観』⁽⁴⁾と『解註謡曲全集』⁽⁵⁾のみである。両書の出版当時の研究の集大成であるそれぞれの解説においても、『能・狂言事典』⁽⁶⁾や財団法人大槻能楽堂による曲目解説⁽⁷⁾においても、『撰集抄』が「松山天狗」の本説であるとされてきている。『撰集抄』の当該説話の西行の崇徳院訪問説話は『山家集』⁽⁸⁾の雑歌を典拠とするものである。西行が崇徳院陵を訪ね奉歌し霊を慰めるという『撰集抄』の当該説話の構図が「松山天狗」の原拠となっていることに間違いはなく、「松山天狗」の本説として『撰集抄』を挙げることに問題はないだろう。しかし、「松山天狗」は、魔道に堕ちて天魔となった崇徳院の姿とその霊の慰撫を表現するものであり、その点で『撰集抄』の説話とは主題が異なるのであり、むしろ『保元物語』の崇徳院怨霊説話に典拠を得ていると言うべきではないだろうか。

本稿では、謡曲「松山天狗」の詞章と、それぞれ崇徳院怨霊説話を語る『保元物語』諸本・延慶本『平家物語』・『源平盛衰記』・『白峯寺縁起』のテキスト⁽⁹⁾とを比較し、さらに舞台表現であることを踏まえながら、能「松山天狗」が表現する世界を明らかにしていくこととする。

二 前場―西行が崇徳院の霊を呼び出す

前場ではまずワキが登場し、自分は西行であり崇徳院の菩提を弔うために

讃岐国に向かっていると次のように名乗る。

これは嵯峨の奥に住居する西行法師にて候。さても新院本院位を争ひ、新院うち負け給ひ、讃岐の国へ流され、松山と申す所にて程なく崩御ならせ給ひたる由承り及び候程に、御跡弔ひ申さん為に、唯今讃岐の国へと急ぎ候

讃岐に到着し松山の廟所への道案内をしてくれそうな者が通りかかるのを待っていると、老体を象徴する朝倉尉の面⁽¹⁰⁾をつけた前ジテが登場し、このあたりに住む老翁であると名乗る。

西行が案内を乞うと、前ジテは、

さては天下に隠れなき西行上人にてましますかや。まづあれに見えたる太山は白峯と申す高山なり。少しあなたに見え候こそ、新院の御廟所松山にて候へ。御道しるべ申さん

と言って、親しく言葉を交わしながら険しくもの寂しい山道を辿り、松山まで導いていく。

ここで「新院の御廟所松山」という地名表現に注目しなければならない。『撰集抄』では西行は「白峯の御墓」を訪ねると記している。『保元物語』でも『平家物語』でも西行が訪ねるのは「白峯の墓所」である。いずれも「廟」という表現はない。ところが「松山天狗」では、「白峯」と「廟所松山」とを区別し、「廟所松山」を訪ねる。

史実としての崇徳院廟は、寿永三年（一一八四年）、後白河院によって京の春日河原に、崇徳院御霊の鎮魂のために建立されている⁽¹¹⁾。また讃岐でも同じく鎮魂のため、崇徳院の名誉復権として墓所を「山陵」と称して天皇陵と同等とし、さらに崇徳院を祀る白峯寺の境内に頼證寺を建立して御影堂としている⁽¹²⁾。つまり史実としては、崇徳院御廟は讃岐国松山には存在しない。また、「松山」についてもさまざまな伝承があり不明確なところが多々ある。

能「松山天狗」が見せる崇徳院怨霊の鎮魂劇

本多典子

【キーワード】松山天狗、崇徳院怨霊説話、保元物語、白峯寺縁起

【要旨】

能「松山天狗」は、配流先の讃岐で魔縁に落ち天魔となった崇徳院の様相と心情を描きだす舞台芸能である。能作者は、『撰集抄』『保元物語』をはじめとする崇徳院の配流と怨霊化を語る物語を典拠とし、なおかつ崇徳院怨霊の祟りを怖れる時代の文化的想像力によって、本作を創り出したものであろう。しばしば能をして鎮魂劇だといわれるが、本作における鎮魂は、崇徳院怨霊に往生をもたらすという意味での鎮魂ではない。魔縁という畏怖すべき異界に堕ちた霊のありさまを舞台上に顕現し、歌と舞楽という芸能によって慰撫する「鎮魂劇」なのである。

一 はじめに

能「松山天狗」は、配流先の讃岐国で失意の末に崩御した崇徳院の廟所を西行法師が弔いのために訪問し歌を奉詠したという、『撰集抄』巻一第七話「新院御墓」⁽¹⁾の説話を本説とした一曲である。作者は不明で、室町時代後期の上演記録以降廃れていたが、稀曲好きの徳川綱吉が復曲させた後⁽²⁾、現

在は金剛流のみに伝えられている。現在も演能の機会は少ないが、上田秋成『雨月物語』の「白峯」とともに崇徳院怨霊を描く作品として知られている。崇徳院怨霊は、繰り返し国家権力に祟りをなして社会を揺るがし、国家が近代に至るまで繰り返して鎮魂を奉じてきた、史上最も怖れられてきた怨霊たちの一人である⁽³⁾。

「松山天狗」の物語は次の様な内容である。

西行法師（ワキ）が新院（崇徳院）の菩提を弔うべく讃岐国に赴き、近くに住むという老翁（前ジテ）の案内を得て松山の御廟にたどり着くが、その寂れ方のあまりのわびしさに涙しながら歌を詠む。老翁は歌に感じ入り、これまで訪れる者は誰もなく、白峯の天狗共が院のお相手をするのみで、自分も時々木陰を掃き清めたりして慰めていたのだと言って姿を消す。

間狂言で木の葉天狗（アイ）が登場し、崇徳院配流にいたった保元の乱のあらましと、崇徳院が生前瞋恚のあまり天魔となり白峯の天狗と共に復讐を誓いつつ、四十六歳で崩御したことを語る。そして、西行の詠歌に感じ入った院がこのあと姿を現し舞楽を奏して西行に対面するので諸天狗は参集するように、と呼びかける。